

# 広島大学教育学講座のあゆみ

—大塚豊教授の語りから—

大塚 豊（聞き手）・中矢礼美・鈴木理恵・山田浩之

教育学会、教育哲学会、教育社会学会など、多くの教育学系の学会で会員への聞き書きが実施されている。その主要な目的は教育学を中心とした研究領域、および各学会の成立と変化の過程を明らかにするとともに、記録することだとされている。

こうした流れを受けて、広島大学大学院教育学研究科教育学講座でも、同様に退職される先生へのインタビュウを行うことが企画された。これまで教育学講座では、とくにその活動を記録したり、資料を蓄積したりしてこなかった。そこで退職者へのインタビュウによって、教育学講座の歴史を記述しようというのである。インタビュウによって浮き彫りにされるのは、教育学講座での教員の研究活動と教育活動のみではない。その教員が過ごした学生時代、あるいはその指導教員などを通して、教育学講座の学生文化や教員文化がいかに形成され、また変化してきたのかまでを明らかにできるだろう。

こうした講座としての企画の最初に、二〇一四年三月に退職された大塚豊教授にインタビュウを行った。研究室の片付けなど退職の準備でお忙しい二〇一四年三月二六日に大塚先生の研究室にお伺いし、二時間弱のインタビュウを実施した。インタビュウは中矢礼美を中心とし、鈴木理恵と山田浩之の二名が補足的に質問する形で実施した。以下はその記録である。なお、文中の言葉使いや会話の内容など、内容を変えない範囲で読みやすいように編集している。

大塚豊教授（以下〇）…この間から（研究室の片付けの）作業をしていて、どこかにあったなあ、ああ、これだったかな。平田嘉三先生っていう社会科の先生の業績目録ですけど、平田先生にはなぜか親しくしていただきました。教育実習の時に、この先生はものすごく怖い先生と聞いていたんですが、教育実習で授業している時に後ろに立っておられるわけ。僕は「大化の改新」かなんかやってたんですね。そうしたら、じーっと聞いておられてね。で、終わった後、廊下でちょいちょいって手招きされて、「君はなかなかいいね、君は誰だ」っておっしゃるから、いやー教育学科です、大塚ですって答えると、「教師としての勘所がいいね」とか何とか言われて、それ以来えらく親しくして

頂いた先生なんですけど。

中矢礼美（以下N）…へえ嬉しいですね。

O…この前からあれこれ見ていて、その平田先生の今までの書かれたもの（『退官記念随想 海』）とかね、沖原先生の『一日一生』とか、こういう具合に研究をしたとか、書いておられるわけです。斎藤秋男先生って、中国研究の大家なんですがね、いただいたもの（『歳月断片——生田・神田での二ヵ年』）をパラパラと、本の整理の途中に見てましたらね、いやーやっぱりこの先生方はちゃんとやっておられたんだなあって、自分はまったくそんなようなことはしていないし。それから三好先生みたいに、最終講義で一冊本（『私の万時簿——広島大学最終講義』）を作られる先生もいらっしやるし。そんな先生方とは全然違うから、いやー昨日までね、昨日はさすがに諦めたけれど、一昨日まで本場にちよつと突然ですがインタビューをドタキャンさせてもらえませんかと言おうと思っただけです（一同笑）。だからまあ本当に、たぶん、「ああ時間の無駄だったな」って後で思われるだろうと思えますけど。

N…思いませんか（笑）。では、さかのぼって聞いていいですか？

O…どうぞ、何でも。

N…先生は教師になりたくて教育学部に入られたんですか、高校の時の夢が教師だったんですか。

O…いやあ教師じゃなくて、日本の教育を変えたいと思っただけです。もう受験勉強が大嫌いだっただから、なんでこんなに受験勉強なんかしないといけないんだ、日本の教育は間違つてると思っただけです。勉強もしないくせに。

N…では、はじめから研究者志向で。

O…そう。そうしましたらね、教員養成ではない、教育学を勉強するところがあるというのを、神戸の教育学部に行っていた、従兄が教えてくれたんですよ。で、東大とかね、京大とか、広島とかまあいくつかにそういう教育学を勉強するところがあるっていうのを聞いて、おおこれだと思っただけ、これが自分の勉強するものだ、高校二年生のとき思っただけ、二年の終わりぐらいですかね。

N…なぜ？受験が嫌だからですか？

O…受験が嫌だからというか、日本の教育は間違つてると思ったんです。で、変えてやろうと思ったわけ。

N…その変えてやろうというか間違っているのはいつぐらいから思われ始めたんですか。小さい時からですか。それとも高校の時？

O…初めはぜんぜん何にも考えてない。だいたい大学に行こうなどと考えていない人間ですから。中学校の時は、術科学校入って自衛隊員になろうかなと思つたし、受験などは全く無関係で、高校生の頃は、最終講義のときにちょっと話したような、むちゃくちゃな生活をしていました。大学へ行こうと思つたのは、教育学をやってやろうと思つてからですよ。

鈴木理恵（以下S）…その時に、でも将来教員になろうっていうようなことではなかったんですか。

O…教員になろうという気はなかったですね。日本の教育は何かおかしいのではないかというのが漠然としてあったわけですね。高校の時の体育の教師が、スパナでそんなひどくはなかったですけどポコーンと生徒を殴つたりしてね、その週番の日誌にその先生を名指して、「これで民主教育といえるか」とか書いて、さすがに正面切つた批判だから呼びつけられなかったな、そのときは。そんなことがあったものだから、まあとにかく教育が何かおかしいと思つたわけですね。けどまあ、振り返って見ると、日本の教育を変える上で何の役にも立ってないって感じています。

S…そうしたら、こういう職業に就きたい、まあ教員になりたいっていうような将来の職業の見込みはなしに、とにかくもう教育学について、今の日本の教育を変えたいっていうその一筋で大学に。

O…そうですね。大学の教師になろうとかという気持ちもないし、どうしたら日本の教育を変えられるかとか分かんのにですよ。

N…政治家になればいいとか？

O…うん、そんなことは考えない。おかしいから、これは何がおかしいかを勉強して、できることなら変えたいと思つ

たわけですな。

N…じゃあ大学に入ってすぐ日本の研究、日本の教育の研究をしたわけでは。

O…いやいや、当時は二年間は教養部ですから。最終講義でもちよつと言いましたけど、僕らの入学したのは紛争の時でしたからね、教育学科なんかはそりゃ意識的な人もたくさんいて、連日クラス討論とかやって、日本の教育はどのこののとかって言うんです。だけどもね、教育学科の学生の議論論つていうのは面白くない。実に真面目なことを言うだけでね、全然面白くない。それであんまり教育学科の人とは付き合わなかったな。

山田浩之（以下Y）…ちよつと話を戻しますけど、どうして広大だったんですか。

O…ああ、ですから、教育学をやるところは旧帝大と、筑波、つまり当時の東京教育大と広島とぐらいたという話を聞いていた。で、東大と教育大がその年、入試がなかったんですよ、学生運動で。もちろん東大があったって受験できる学力はないですけど。だから、教育学を本当にやろうと思った人たちは、東大と教育大が無くなったから、だいぶ志望校の変動があったでしょうね。あの年はね。それでさて深刻に、高校三年生になってからまあ受験勉強をしたんですけど、数学が全然だめで、そうしたら高校三年生のときの先生が、広大は数学がオーソドックスな問題が出るといわれたわけです。それで、受けたつていうだけの話なんです（笑）。それから高校の先生の知り合いから広大の先生の名前を聞いたこともありましたね。だけでも、あそつだ、その人は鳥取の教育委員会で割と幹部の人だった方ですが、この文理大の卒業だったんです。それで、広大には良い先生がいらつしやる、という話は聞いておりました。

Y…先生の高校の先生とかにその高師文理大の…。

O…高師文理大ではなくて金沢大卒業の先生が数学担当で、学級担任だった。国立大学受験なんてのは最初考えなかったんです、本当に数学ができなかったから。そうしたら、その担任の先生が、「お前、家にそんな金があるわけでもないのに、何で私学なんぞ行くんだ。三年になつてちよつとひと頑張りして国立へ行かんかね」つておつしやるから。僕は本当に私学、どつかの教育学のある私学でも入ろうと考えていたんですが、それから一念発起して数学をやつたつ

ていうことですね。だからギリギリで、本当にギリギリで入った。

Y…得意科目って何だったんですか。

O…まあ文系の科目は割と好きでしたね、国語とか英語。生物は好きでしたね。その頃は五教科七科目でしょ、だから地理と歴史では日本史とって、生物と地学とったんですよ。

N…世界史は？

O…世界史はねえ、あの、やってない（一同笑）。高校の時の教師が鳥取県の勝共連合のトップかなんかだったんですよ。正月の最初の授業でね、「はい、みなさん、今年は何年ですか」って。千九百何年でしょとか、あるいは昭和何年とか言うでしょ、「いやいや、そうじゃなくて紀元何年ですか」、こういう人だった。だからもう全然勉強を教えないわけ。そういう先生でしたから世界史は関心がなかった。あはは。だから後で苦労しましたね、比較教育学をやるうえで。

N…じゃあ中国なんて全然？

O…いや、中国には関心があったんですよ。中国は昔から。高校生の頃に本屋に行って、中国語の本を開いて、ちょっと初級会話みたいなのを覚えて、友達に、「挨拶はこう言うんだぞ、中国語で」、とか言ってみましたから。多少は関心があったんですよ。漠然とした。なぜかというのは特になかったんですけどね。

N…めずらしいですよ、先生の時に中国ってそんなにまだ…。

O…ああ、まだ全然。国交回復前ですから。七二年でしょ、国交回復は。

N…まだ何も広まっていない頃ですよ。

O…ええ。だから学部の卒論で、中国をやりますと言った時、沖原先生は、そんなものどうするんだって言われましたね。ドイツの比較教育学をやれと。ドイツの比較教育学で、あるいはドイツにおける教員養成の比較研究といううなテーマでやれというんで、一生懸命ドイツ語訳したりしてたんですよ、学部の頃は。三年生になってから、そ

そう、それで比較教育っていうのは、だから沖原先生の影響で、比較教育っていうのはなかなか面白いんだなって。そこから日本の教育から外れてしまったんですけど。

N…授業を受けてからですか？

O…どうしてですかね、世界の教育とかっていうのに関心を持ったんでしょね。

N…それは学生運動が終わってからですよね。

O…そうそう。

N…授業が始まってから？

O…そうですね。だから高校生の時の日本の教育を変えてやるっていう決意もいい加減なものだったというのが本当のところ。実にいい加減なもの。

S…三年生の時にゼミがやはり分かれるんですか？

O…三年生になってから本格的に教育学部の所属になるんです。当時は、三年生になって。だけど講座を決めるのは、小講座ですね、それを決めるのは三年の途中からですね。最初からっていうことではなかったですね。

S…今は一学年定員三〇人ですけど、先生の頃は何人、一学年が何人ぐらいいらっしたんですか。

O…えっと二五人だったんじゃないかな。

N…沖原先生の授業は三年生の時に受けられたんですか。二年の時？

O…えーっと、三年生の時に受けていると思います。そうそう今度も家の本の整理していたらノートが出てきて。比較教育の。こんなことやっていたんだなと思ったりしましたけどね。

N…それは貴重ですね。見てみたいです（笑）。

O…沖原先生は昔からシラバスをちゃんと書かれてね、それでその通りにされる先生でした。コロナビ大に留学して帰ってこられた直後で、やっぱりアメリカ流のそれを実践されたんですね。だから、あの時代、私は今学期、こう

いう授業をやりますっていうのを、最初に話されるような先生はおられなかったですよ。沖原先生だけはね、一五回分の内容を示されて、それをその通りやられていましたね。几帳面に。シラバスのはしりです。

S…当時はめずらしいですよ。

O…そうだと思いますね。ええ。授業自体はあんまり、まあその、ははは、まあまあだった（一同笑）。いや、外国がどうなってるんだっていうのに関心があるから、私には面白かったですけどね。

N…えっ、いろんな先生方がいらっしやるわけじゃないですか。授業で。一番面白かったのは、そういうわけじゃないですか。内容が面白かったとか、人が面白かったか。

O…いやー、杉谷先生とかね、哲学の、人間的に非常に興味がある先生でしたね。面白かったですね。それから是常先生とかね、哲学の。それから吉本均先生とか。新堀先生はもちろん。あの頃ちょうど、なんか文部省の、えっと社会教育、正しくはなんていうんですかね、社会教育の関係で文部省に出向してらっしゃったんですよ。で、帰ってこられた頃で、授業受けたりしましたね。

N…学生運動のあとに、その先生方が授業始める時って、なんか溝が感じられるとか。

O…それはもう過ぎていきますから。だから、昭和四四年のバリケード解除になって、授業が始まったら、もう運動も急激に下火になりましたし、運動していた人たちは外へ、学外へ出てしまったから、中核とかみんな外へ出たから。学内は静かになってきましたね。

N…じゃあその頃、いろんな議論をやっていた人たちっていうのは、出た人たちですか、それとも…。

O…出た人もいる。それからもう大学の途中でいなくなった、退学されたりした人もいたし。どこにいったか分からなくなつた人もいましたね。

Y…ちようど先生が入られた年が、その学生運動の最後の年だった感じですか。

O…そうです。だからええ。四四年の七月かなんかに、八月かな、夏休みに広大に機動隊が入ってバリケード解除に



なつたんです。それで授業が九月から始まつたんです。それまではだから、クラス討論とか、そんなことはばかりやっていたんですよ。

Y…教育学科っていうか、その塊みたいなのは、そういう状態の中でもあつたわけですか。

O…それは、あんまり感じなかったですね。クラスに関して言えば、イデオロギーで別れてしまつて、バラバラになりましたね。だから。教養部の時はドイツ語などは一緒の授業をだいたい取るんですよ。教育学科とか心理学科と一緒に。その時は一緒になりましたけど、まあやっぱり仲良しのグループは仲良しのグループで数名ずつ集まつて、だからこう、学科として何かをするっていうのはずーつとなかったですね。

S…入学された時は先生との顔合わせみたいなのはなかったんですか？

O…ああ、それはですね、えー、あれは大学院だったかなあ…。教育学科には伝統があつて、先生が新入生を招待するっていうのがあつたんですよ。それも立派なところで。羽田別荘っていうところで。古江かあのへんに今でもあると思う、由緒ある店。そこに先生方が全部もちで学生を招いてくださるわけ。それでいろんな話をうかがつたりして、でも僕らの年は、入学した年は全然覚えがないんですよ。大学院に入った年は確実にありましたけどね。写真も残っているんですがね。その時に学部生もバラバラで入っていますから。だから、やらなかった年もあると思うんですけど、それがずつと伝統としてあつたようですね。先生方も大変だったでしょうけどね、あんなたくさん、学生を招待するなんて。

N…ですよ。すごい…。先生が学部の時つて、部活とかされていたんですか。サークル？

O…ああ、いや、言うのも恥ずかしいですけどね、僕が三年生の時に入ったんですがね、沖原先生の比較に行こうかなと思つた時に、おそらく比較教育学をやるには、英語はこれらもう必須であると。研究者になりたいんだつたら必須で、それプラス自分のフィールドにしている言葉はやらないといかん。そうそう、それが沖原先生から教わつたと、非常に大事な教えですね。だからE S Sに入つたりしましたね。

N…へーすごい。真面目な学生じゃないですか。

O…いやーそうじゃない、不真面目な学生でしたよ。それまでもね、英語はやらないといかんと思っていました。でも英会話学校に行ったりすると、月謝だってすごく高いでしょ。入学金も何万円とか。だから、ラジオのNHKの英会話教室とね、あと平和公園英会話教室ですよ、岩国の米兵が来るでしょ、GIが。それをとっつかまえてはしゃべる。

S…平和公園ですか？

O…うん、でも非常に仲良しになった人がいますよ。ベトナム戦争の頃だから、明日、もう出かけるとなると、向こうはもう命がなくなるかもしれないわけでしょ。だからものすごく落ち込んでね。僕は岩国までね、お守りを届けに行ったことがありますよ。日本のお守り。もちろん基地の中はオフリミットだからね、あそこのゲートとか入れないけど。「ボブ・タッカーっていう男だけでも、これ日本のラッキーチャームだから渡してやってくれ」とか言って門番に頼んでね、そんな付き合い、まー本当に短い付き合いだけど。だからそういう実践英会話は、やっておりましたね。

N…すごい、すごい勇氣ですね。それ一人で行かれてですか。

O…一人でも行きましたね。ESSに入ってもね、それはやりましたね、友達と一緒にいったり。

N…普通に話しかけて？何の話をするんですか？

O…だって観光客だったり、あきらかにGIと分かる人は話しかければ、向こうも暇にしてるわけだから。話し相手。それから日本のこと、いろんな情報を知りたがってるでしょ。で、なんだかんだ話をして。

S…そういう勉強法があるんですね。

O…英語はやらないかと思いましたがね。昔から。

N…そのサークルって先輩後輩は厳しかったですか？

O…いやいや、全然厳しくない。未だに仲良くしてて。もう卒業して四〇年もたつのに。いまだにね、後輩の面倒見のいい、〇〇〇（企業名）に入った男がいて、未だに年末の今の現役の忘年会には毎年来てるんですよ、その男は。それから忘年会のその当時の四四年とか四五年に入ったような何人かで、集まって忘年会をしたりするんです。数名ですけどね、その付き合いがずっとあるのは。ESSの友達とは、割と深い付き合いをしましたね。学科の友達よりも。大学院に入ってから始めて、学科の友達と割と仲良く、親しくなりましたね。

N…そうですね。えっ、そのESSの同級生は何人、サークルじゃあ何人ぐらいなんですか？

O…三〇名ぐらいいたんじゃないですかね。ESSつてのは、広島地区にもHESSELつていうのがあって、広島何大学かでESSのディベート大会とかね、それから中四国にもあるんですよ。そのディベート大会とかね。そこで勝つと東京行つて、大会に出るとかあったんですよ。でも、僕は本当に熱心に取り組まなかったですから。加しなかつたわけではないですけど、そんなに熱心に取り組まなかったですから。

N…大変そうですね、ESS見てたら。練習とかもすごいでしょ。

O…練習というか、まあ、うーん、そういうディベートに勝たないといかんとかあると大変でしょうね。こっちは手っ取り早く金かけずに、英語の力をつけようと思ってるから、まあ、遊べるところは遊んで、つていう感じでした。

N…顧問の先生は英語の…？

O…特に顧問つてなかつたですね。先輩が指導というか、まあ一緒にちよつと練習するつていう感じでした。顧問というクラブでは顧問もあつたんですけど、ESSに関しては、なんか同好会みたいなものでしょ、あれ、いまだに。だからなかつたと思いますね。それもね、昔あつたESSも一回つぶれたんです。思想問題が原因で。

Y…中での活動はどんな感じだったんですか。そのESSに行くと、毎日、その…。

O…大学会館の三階、千田町の大学会館の三階に文科系のサークルの集まる場所があつて、その一角をもらつていて、そこで何やつていたんですかね。うだうだ、うだうだ喋つていたり、まあその大会が近付いたりすると、レシテー

シヨンだとかデイベートだとかの大会が近付くと、集まって練習をしたりしていましたね。それからノートルダム清心とか女学院で、男子学生の中にはそれこそ今の合コンみたいなので（一同笑）、利用しているものもあるし、仲良くなつた人もいましたけどね。そんなので、他大学の学生とも付き合うでしょ。そんなことして、遊びですよ、本当に。

N…えっ、でも話すときは英語で話すんですか？

O…いやいや、今はどうか知りませんが日本語でしょ。そんなに上手じゃない。途中で、英語でやろうと決めて、ここに入ったら一切日本語使っちゃいかんとかいうのになつたこともありましたね（笑）。だけど…。

S…それは三年生、四年生、大学の四年生の卒業なさるまでずっと続けて。

O…ええ、確か大学院に入ったらほとんど行かなくなりましたけどね。卒業までは少なくとも顔を出していたような気がしますね。

Y…その、でもESSの活動で、英語の力はかなりつきましたか。

O…ESSでついたので、そのー平和公園英会話教室でついたので分かりますけどね（一同笑）。あとで、マスターの二年生の時アメリカに留学したんですが、その時に、まああんまり困りませんでした。授業についていったりする上だね。だから、その何年間か、ボチボチやっていたのが、役に立ったんでしような。

S…大学の授業に付いて行くって相当ですね。日常会話はもう当然でしょうけど。

O…喋るとか聞くっていうのはそんなにまあ、喋るのは大変ですけど、でも聞くっていうのはそんなでもなくて。やっぱり読むのが大変ですよ、アメリカの大学はアサインメントがものすごく出るから。一年間でマスターを取ろうと思うと、一学期に四科目取らないといけないんです。アメリカの大学院で四科目を取ろうと思うと、もう死にももの狂いでしたね。それぞれの授業でアサインメントが出るわけでしょ。一冊読んで来いとか、論文何個読んで来いとか。だから、もう目があるときは本を読んでいるという感じで。だから、喋る、聞くっていうのは、付け足して、読むほうが大変だったですね。

S…日本にいらつしやる時、学部之三、四年生のとき、ESSをなさる一方で、やっぱり読む方もなさってたんですか。O…それはまあ演習とかもありますでしょ。当時は、方法学なんかは、ドイツ語でやって、哲学もドイツ語だったかな、大学院ももちろんそうですが、演習は英語を読むっていうのが多かったですね。沖原先生の演習もそうだったし、新堀先生のも英語を読んだりしたこともありました。それから、一緒に、グループワークをやったこともあったし、だから演習は、やっぱり今に比べて外国語、主に英語を使つての教育・学習っていうのが相当多かったですね。

Y…今と比べると当時のそういう演習の授業ってどういう感じだったんでしょうか。

O…学部の時の横尾先生の西洋教育史の演習は原書をずつと、一文ずつ当てられるんですよ。とつとつとつとね。で、つまると「次」と、もう待つてくださらない。「次、勉強してないやつが悪い」という感じだね。「はい、次、次」。ええ、どんどん一文ずつ読んでいくっていう演習がありましたね。

N…英語を読んで日本語に直して？

O…そう、英語を読んだ覚えがないんだな、ほとんど一文ずつ訳していったり。いや、読んだ授業もありましたけどね。読むよりも、むしろ中身を理解するっていうのが大事だから。ドイツ語は比較的読ましていたかな。ドイツ語もあんまり読むよりとにかく頭から訳していくという感じでしたね。

N…そんな授業なのに、なぜ中国？ 大学院に行くのは中国の研究がたくて行かれたんですよね。

O…ええ。そうですね、だから、さつきも言いましたけど、三年生の時、先生としてはドイツ語をやらせようと思つておられた。だけど、どうもね、何回翻訳しても面白くないんですよ（一同笑）。うん、それでね、まあ、中国語は大学二年生の頃からずつとやっていたんです。これは独学で始めて、これはいつかは使うだろうと。いつかは中国をやることになるんじゃないかと思つてたんですね、実は。まだ国交回復前ですからね。要は関心があったんです。

O…いやーだからもう新聞雑誌ですよ。雑誌も、今日大量にバックナンバーを捨てましたけど、『紅旗』とか、『人民

『日報』を…。

N…そんなのは、その辺にあつたわけじゃないですよ。

O…だから、買っていたんです。買った、それから、文学部の東洋史と、中文の部屋には新聞がありまして、それを読んでたんです。最初、大学二年生、三年生の頃なんかはまだその新聞をさーっと読めるような力はないから、まず基礎をやるのは、市販の教材を使ったり、それからNHKの中国語会話、ラジオ講座を聞いたり、後になったら、日中友好協会の講座に行ったりね。それから単位は一単位も取ってないですけども、教養部の授業とか文学部の授業を聴講させてもらったんですよ、先生に頼んで。

S…単位不要で文学部のを取られたんですか。

O…当時はまだ大陸からの先生はおられなくて。香港の先生、楊（啓樵）先生っていう先生が来ておられて、中国語で、『文心雕龍』っていう古典を読むという授業があつたんですよ。定期的に学部じゃないなあ、あれは。学部の頃は『文心雕龍』なんてとても分からないですから。その授業も取らしてもらいましたけど、楊先生の学部生対象の中国語の授業にも潜り込ませていただきました。『文心雕龍』を読んだのは大学院に入ってからですね、本格的に。で、「教育学部生で、単位はいらないけど、聴かせてもらえますか」というと、勉強しようという学生は今でもそうですけど、「そりゃあ来なさい来なさい」と言ってくたさるわけ。それで受けさせてもらったんですね。まあこんなふうに中国語やっていて、ドイツ語はまあ先生がやれと、おっしゃるからやっていたんだけど、全然面白くないし。それから、四年生に入って途中で、夏よりは前だったと思いますが、中国に変えたいって言ったんですよ。すると、いや中国なんかやって、どうなるっちゃうんだと言われて（一同笑）。まだ何とも分からんものをやってどうするんだという話でしたね。だけど、いやーやっぱ中国をやりたいし、実は中国語をずっと勉強しておりまして、やりたいと押し通して。卒論はだから中国の教育で書いたんですよ。

N…資料など少なかつたんじゃないんですか。

O…だから、もうほとんど新聞、雑誌。中国で出ている日本語の雑誌、『北京週報』とか『人民中国』とか。中国のイデオロギーの宣伝雑誌ですけど。そういうものも少しずつ読んで、中国教育に関する専門書っていうのは日本では、斎藤秋男先生のものとかね、多賀秋五郎先生のものとかが、一、二冊あったぐらいで、ほとんどなかったですよ。だから、うん、そんなのを読んで、まあ、独学ですよ。

N…沖原先生は怒られなかったですか？それ以上は、とか…。

O…やりたいというのに、そりゃあだめだとはおっしゃらない。まあ、そりゃあ、そんなものやってもどうにもならんぞとは、おっしゃったけども、まあとくにやめろとはおっしゃらなかったから、やらせてもらったというか、卒論はそれで書いた。もう本当にやつつけ仕事の卒論ですけどね。

S…卒論は、「現代中国教育研究序説」という…。

O…ああ、またえらくたいそうな名前をつけたもので（笑）。いやあ、今堀先生に、何とか研究序説っていうのがあってね。総合科学部長だった今堀誠二先生、もう中国研究の大家ですよ。日中戦争の頃に中国大陸に行かれてね。中国の家庭に入って、ふすまの裏に貼ってある紙、その紙に書いてある証文だとか何とかを使ってね、中国の社会構造を明らかにしたという。広大にそういう先生がおられた。今堀先生の授業も聞きました。それから、卒論を中国で書くうと思っただけですよ。総合科学部の先生の所に、その頃もう総科は出来ていたのかな、教養部長かもしれない、「教育学部の学生ですよ」って訪ねて行ったんですよ。そしたら見ず知らずの学生なのにね、資料を貸してくださってね、「こういうものがある、まあ読みなさい」と言われたんですよ。それで今堀先生の本を読んで中国研究序説っていうのがあることを知って、自分も「何とか研究序説」って書いてやろうと思っただけ（一同笑）。それで、そういう大仰なタイトルにしたんですよ。そう、何とか序説っていうのは、駆け出しが書くんじゃないかって、相当な大家が、いやいやまだ序説でございますっていう感じで書かれるから意味があるわけ（一同笑）。本当の駆け出しが、序説にもならないことを、とんでもない話ですよ。

N…でも、すごいごっついですね、先生。よくこんなの半年で書きましたね。

O…分量はすごいですよ。うん。えっとね、百：一八〇枚ぐらい書いたんじゃないかな。四〇〇字詰めで。

N…もうほとんどが翻訳じゃないですか。

O…翻訳といやあ聞こえがいいけど、そんなに翻訳をバンバンできるわけではないし。中国語のものも使いましたけど、日本語の資料を使ったり、そのまあ、当時のことだからねえ。自分なりに中国の教育っていうのはこういうものだ、というイメージを書いたんですよ。

S…そうやって細かい点と点を結び付けて、こう線にして、っていうふうなことを作業しないといけないわけですね。資料が限られているから。それでよくそんな一八〇枚も。沖原先生は何と、この卒論に関しては。

O…当時は、もう卒論などは、そんなこと言っちゃ何ですけど、書くのが当たり前という感じで、書けないような人はいなかったんじゃないかな、みんな書いてた。

N…指導は毎週あった…？

O…そんなものないですよ。講座っていうのはやっぱりありがたいもので、先輩とか、助手の先生。僕らの時には田崎さんっていう英語を出てからこの比較にいられた、福岡教育大にいらっしやった先生の、田崎さんが助手でした。で、田崎さんの同級生が二宮先生。二宮先生が二八歳かなんかの時に、文部省から帰ってこられた。まあ、先輩という感じだから。先生は先生なんだけど、まあ先輩っていう感じ。で、まあいろいろ教えていただいたんです。沖原先生は今のように入り取り足取りではなく、そういうやり方は沖原先生だけじゃないとおもいますよ。学部の卒論を取り取り教えるっていうことはなかったですね。マスター論文でもそうですよ。修論ぐらい自分で書ける人間が大学院に來いという雰囲気でしたから。だから、まあみんなそれぞれ修論で悩んだんですが、特研の時には、確かに何回か発表がありました。うん、特研の時に、今こんなことを考えていますとか、こんな資料を読んできましたとかって発表して、それに対して、先生もいらっしやるわけだから、ああ、それはどうこうっていうコメントがありました



けどね。まあだいたい先輩、上級生がどうのこうの、書き方はこういう風に書くんだとか教えてくださったんです。あとはもう見よう見まねですよ。他の先輩の書いた論文を読んで、ああこうか、注つていうのはこういう風に書くんかとかね。

N…先生、いつから大学院に、進学しようと思われたんですか。

O…それはやっぱり、だから中国研究をやるうと思つたところから、もう将来のキャリアとして、研究もいいなと思いついてましたね。

N…それはそうですね。四年生になったら就職するか考えるつてことですよ。

O…そうそうそう。で、教員免許を持つていましたから、社会科、高校と中学ね。で、鳥取へ帰つて教師になるかとも思つたりしたんですが、もう日本の教育を変えようとかいう大それたことはすっかり忘れて。そして、前にちょっと話をした教育委員会にいらつしゃつた先生などにも、大学院に行こうか、帰つて教員やるうかどうしようかと思つていますが、といったら、教師はいつでもなれる、もう少し勉強したらどうかとおっしゃつたですね。うん、でまあ、それじゃあまあ、もう少し大学院で勉強するかなあと思つたわけです。

S…その勉強の面白さ、大学院にまで進んで勉強したいという面白さつていうのは、いつどうやって発見、発見というか気づかれたんですか。

O…いやー、やっぱりそれは中国をやつて、卒論を書いたりする過程でいろいろなもの調べたりすると知らないことが少しずつつかつてくる、そういう面白さを覚えたんでしょうね。

S…それつてやっぱり中国をやつている人があまりいないつていうのは、自分だけが知つている世界つていうようなそういう面白さもあつたんですか。

O…それはなかつたですね。周りに人がいない、相談する人もいない、つていうのはありましたからね。そうですね、今堀先生みたいにその中国研究の大家がいらつしゃつたけど、教育ではないし。だから当時はもう本当に阿部洋先生

とか、斎藤秋男先生とか中国教育研究の偉い先生たちが書かれたものを読んで自分なりに理解をしていくということですよ。

N…こんな先生になりたいとかっていう、先生はいましたか。

O…いや、みなさん本当に立派な先生でしたね。新堀先生なんか私はやっぱり憧れますね。何人かいらっしやった先生の中でやっぱり一番印象深いというか、ああすごい先生だなと思ったのは新堀先生でしたね。

S…どういうところ？

O…やっぱり発想というか、ええ。発想の面白さですよ。それから、他の先生とは違うコメント。「英語はね、動詞が大事なんだ」と言われてね、ああ、いまだにそれは覚えてますけど。動詞がうまく使える人間が本当にうまいですよ。単語はいくらでも新しい単語が覚えられるんだけど、動詞を的確に使えるのがやっぱり外国語がうまい。そんなことを言われたり、まあ、いろんなことをいわれたけど、もう記憶が定かではありません。

Y…横尾先生は？

O…ええ、横尾先生は西洋教育史の先生だから、さっき言った、カバリーの原書を読んだり。あの頃『大学の起源』を翻訳されたすぐあとぐらいだったのかな。それはもう怖い先生という感じだけでしたね、学部頃は。もう本当に、予習していかないと、バンバン飛ばされるしね。もうはつきり評価をされるという感じがして。怖いという感じしかなかったです（笑）。「次っ。そんな訳しか出来んか。」とか言われるからね。

O…横尾先生は、もちろん大学院でも厳しい先生でしたけど、大教センターで助手をした時に、センター長でしたし、それからセンター長をやめられて国研の次長で出られて、そのすぐ後を追うみたいにも国研に移りましたから。で、国研の時代は、先生が次長をしておられたしばらくの間、二軒長屋の隣同士だったことがあるんです。それで、うちの生まれたばかりの子どもの子守りをしてもらったり（一同笑）。それから、夕食、先生は単身赴任だったもんですから、先生と一緒に食事をしたりってこともあったし、まあ非常に親しくしてもらった。それから東京で西洋教育史

の特研を、在京の人たちがやったりしておられて、その時に、「君も来んか」といわれて、話をさせてもらったりしたこともありました。ですから、大教センター以降は、非常に親しくというか、近くでつきあわせていただくことになりまして。今までのその怖いだけの横尾先生というのではなくて、非常に人間的に魅力のある、魅力あるなどと言うと畏れ多いけども、いい先生でね。本当に尊敬していました。あの学識の深さっていうのはすごいんですけど、本当に。そういう先生がいらっしやいましたね、僕が若い頃。そうですね、学識の深さでは横尾先生はすごいですね。

Y…学部の時は怖いだけだったっていうのは、なかなか近づけなかった感じ…？

O…うん、やっぱり教師と学生との間が距離がね、今のように近くはなかったですね。まあ、年齢的なものもあるでしょう。こっちもちょっと最近では学部生なんかと世代が違って、煙たい存在だと思われるのかもしれないけど。ちょっと我々とは違う存在の世界の人だという感じがして。畏れ多い人だという感じがしていましたね、教授クラスの先生は。だからその、ひよいひよい気安く訪ねていくとかっていうのはなかなか出来ない雰囲気がありました。

N…それは他の先生もですか。

O…ほかの先生もやっぱりそうですね。他の先生もやっぱり、ちょっと我々とその、一緒にわいわいとするという感じの間柄ではなかったような気がしますね。先生との間はね。

Y…でもよく自宅に招かれたりとか、そういうことは、なんかやられていたって。

O…ええ、そういう先生もいらっしやる。沖原先生も招いてくださったことがありましたね。だからまあ先生によりますけどね。

Y…ご自宅に行っても必ずしもそこで打ち解けるっていう感じではなかったんですか。

O…やっぱり、こっちは緊張してるでしょ、先生のお宅へ行って。ご馳走になるとかね、お茶をいただくとか、やっぱり緊張しっぱなしだから。そんな関係でしたね、先生との間はね…。まあ学会と一緒にいったりして、なんだかなだ話をしたり、その中で少しずつ、ちょっとずつ距離が縮まっていくっていうような感じですかね。

Y…そんな中で大学院に進学するっていうのは、学部生にとってどういう雰囲気だったんですかね、当時。

O…いや、やっぱり、そりゃ勉強したい、学問したいということで来てたような気がしますね。それから当時大学への就職がそんなに良かったとも思えないですね。だから、まあ教職でしょうが、ここにいればドクターまで行ったらなんとか、短大とか、どっかには行けるかもというのはあったのかもしれませんが、まあその保障は全くないし。だから、同級生で大学院に行った人たちでも、大学の教師になるためにとかでなくて、やっぱり研究が好きでという感じで大学院に行っている人が多かったんじゃないかと思えますね。

N…大学院に行く時っていうのは、みんな勉強会をしたりとか、授業が一緒だからそれを覚えているんですか。

O…ああ、昔はね、大学院の授業では国語の吉田（裕久）先生とかそれから数学の岩崎君もいたなあ、比較的授業なんかにも単位取りに来ていたんですよ。やっぱりカリキュラムが変わったからでしょうね。取れなくなったのかな。あるいは自分のとこだけでも一杯で、取る意味も無くなったんでしょうね。だからみなさん来ておられて、一緒に授業だったことがある。ずーっとその後も、親しくて、吉田先生なんか、資料がないから国研に行くけど、ちょっと便宜を図ってくれと言われたりしましたね。そんな付き合いになるんですよ。

S…大学院の時はもちろん、毎週一回特研があつて…。

O…はい。

S…大学院生と沖原先生とかが特研、で、学部の時も、さっき特研でたまに発表なさってたつておっしゃったんですが、先生からそうやってちよつとコメントをもらうような機会っていうのは、特研だけだった…？

O…特研の時だけだったですね。大学院も一緒にやりましたよ。

S…ああ、やつぱり。

O…比較は、他の講座は分かりませんが、院生、学部生と一緒に。あれはしかし特別なのかなあ、発表会とかなんか、卒論の発表会の前だから特別にやったのか。でも大抵先輩も一緒でしたね、特研というと。だから、一緒にやつ

てたんだろうと思うんですよ、学部生も。

N…じゃあ、入りやすい雰囲気ですよ。大学院に入るって言っても。知っている先輩のところに、続けて勉強するって感じですよ。

O…だから、学部と大学院の距離が今よりも近かったんじゃないんですかね。

N…部屋は、研究室はあったんですか、院生室、学生室。

O…院生控室っていうのは一部屋だけありました。でも大抵は学部生でも、助手の部屋に出入りするようになっていましたね。だから助手の部屋がたまり場になっていてそこに。一講座一助手ですからね、当時。だからその助手の先生のところに行って、なんだかんだ、お茶飲んだりしながら話をすると。ああ、それから、その頃は他講座の助手の人たちともね、割と親しかったですよ。中野さん、方法の助手とかですね、いくつかの部屋の助手の人たちとは、そこに行ったら相手をしてもらえた。横のつながりは比較的ありましたよ。

N…いつから壁が高くなったんですかね。私たちの時は高かったですから。

S…高かったですか。

N…もつといろんな講座と交流しましょうみたいなことを言われましたけど。

O…ああ、研究面であんまり形式的、フォーマルに講座同士の共同で研究やりましょうっていうのはなかったと思いますけど、インフォーマルに付き合うっていうのはあったと思いますね。

Y…なんかお話を聞いていると僕らの世代よりも、先生たちの世代って言いますか、その（私たちより）もう少し上の坂越先生とかの世代の方が、他の講座との関係ついでいいですよ。僕らはほとんどそういう関係がなくて。まあ、ないわけではないんですけど、なんかやってはいけないみたいなの雰囲気があったんですよ（笑）。

O…何で、どこからそう変わったんですかね、やっぱり教師がそういう雰囲気を持っていたんじゃないですか。なんか、自分のところに学生を、あまり困い込んじやいけないと思うんだけどね。自分の講座だ、うちの学生だとか、他

講座の学生だとかね、みんな教育学科ですからね。

N…あんまり仲良くなかったかも、先生同士（笑）。

O…先生同士の関係、それがあられるかもしれないですね。まあそりゃあ人間ですからね。それはね、仕方がないですよ。その一、あらゆる講座の人と仲良くしてるわけじゃなくて、そりゃあやつぱり、特定の講座の人としか、つきあわないわけですからね。

S…学部頃から加わっておられた特研で、特にこの沖原先生からしょっちゅうこう言われていたこととかで記憶に残っておられることとてありますか。

O…ああ、これはね、文章は難しいことを書きちゃいかんというのはもう口を酸っぱくして言われましたね。余分な形容詞をたくさん書いたりしない、とにかく分かりやすい文章を書けと。分かりにくいことは誰でも書ける（笑）。分かりやすく書かんと本物じゃない、というのはずーっと言われましたね。難しいことを分かりやすく書くのが、ちゃんと分かっている証拠であると。沖原先生の文章なんか分かりやすいですよ。分かりやすく書けと、言われましたね。それは覚えています。それからもう一つは、比較教育やるんだったら、語学が大事であると。その二つぐらいかな。あとはちよつと権威主義的だなと思いましたが、「誰が言ったのか」、立派などなたか偉い先生が言ったことなのかと言われるから、いえ、私が考えたんですと（一同笑）。それじゃあダメだと言われて（笑）。いや、そうですかねと反発したり。でも、先生のおっしゃるのも正しいんです。いや、ちゃんと先行研究を勉強したかという意味ですからね、取りようによつては。芽を摘もうというのではないけれども、取りようによつては、それでもう萎縮しちゃういますよね、学生は。だから、物は言いようだなと思つて、自分が教師になつても思ひますけどね。

Y…それで、大学院の一年生の時にアメリカに、行かれたんですか。

O…いや、一年生の時から留学試験を受けたんです。文部省が何年前から、僕が第二期、二年目ぐらいの時かな。

安原先生もオックスフォードにそのプログラムで行かれた。僕もその年ぐらいから受けてまして、試験は通つていた

んですが、最初の年、香港にアプライしました。まだ大陸は行けませんでしたから。香港の中文大学っていうのに行こうと思って入学許可を求めたんですけど、締め切りまでに、とうとう入学許可証が来なくて、それで、一年目は棒に振ったんですよ。で、二年目またアプライして、また学内っていうか、その審査に通ってね。今年は去年の轍を踏んじゃいかんと思って、いろいろ考えたんですよ。それで、そうしたらその少し前、何か月前に、フレイザー先生、スチュアート・フレイザー先生というアメリカの中国教育研究では権威とか、トップだとか言われている人が広大に來られたんです、沖原先生のところね。それでその時に会ったんじゃないかな。うん。確かそうだったと思うなー。記憶が定かでないなー。出会ったから知っていたんだろうと思うんです。それでなかったら、フレイザー先生って知っていないと思う。あるいは本を通してでしたでしょうか。で、フレイザー先生のところに行こうと思ったんです。中国に行けないんだったら。香港にも行けない、大陸にも行けないんだったら、台湾はねー、自分もイデオロギー的にやっぱり毒されていたんだなー、台湾に行ってもしょうがないという感じをその頃は持っていたんです。台湾に行っても、中国語の勉強の仕方違うし。それから、大陸とにかく行きたいと思っていて、大陸に行けないんだったら、アメリカに行ってみようじゃないかと。比較教育の、アメリカでの比較教育学っていうのと、中国研究っていうのはどういうものか、行って見てみたいと思っただけです。

N…最終講義を聞いた時に、私びっくりしたんですけど、そのフレイザー先生が中国語を読めないって。それでどうやって研究をされ…。

O…中国語が読めないから、いつでも中国人の学生とか、韓国人の学生が周りにいるんです。北朝鮮の研究もあるし、ベトナムの研究もある。だから留学生をうまく活用していらっしやったわけ。

N…ええ？でもその人の訳が違っていたらどうするんですか？（笑）

O…うん、まあだから基本的な文献、本当にオフィシャルな信頼のおけるものを使われるんだろうと思いますが。

N…でもそれ、英語に訳されているものですよ。

O…そうですね、そうですね。英語に訳されたものを使う。まあ、そういう意味では、アメリカは、いわゆる中国、チャイナスタディっていうのはものすごく進んでいますから。文献の翻訳とかは、ものすごい時間とエネルギーをかけて、やっていたんですよ。中国研究者も連邦の教育省にもいたし、そのバーレンテセンって人も非常に親しくなって、付き合いましたけどね。コロンビア大にいた華人のC・T・フー（胡）とかね、何人かいて。金をかけていましたね。教育だけ見てもそうですが、中国一般の政治経済に関する情報をアメリカは、本当に集めていたんですよ。だから、英語だけでもやれないこともなかった。それから、どうしても読みたいものは、それこそ留学生に、私も含めて、ここをちょっと読んでくれと、これはどうということとおっしゃるから、こうですわね。

N…え、今、先生が振り返られて、そういう研究スタイルっていうのは比較教育学者としてどう思われますか（笑）。

O…ああ、僕はあまり好きではない。それはいい加減なものだと思っていますけどね。  
N…ですよ。ちょっと、それだけは信じられない感じがしますわね。

O…でも、やっぱりそのものを見る目ですから。あるものをどう解釈するかだから、そりゃあやっぱり本当にすごいところもあるんですよ。フレイザー先生の研究っていうのは、ああ、そういう見方もするのかって思ったり。日本の中国研究者はまあ割と親中国的な評価をする人とか、そういう人ばっかり見ていたわけだし。反対に批判的に見る人は、またイデオロギー的に、反中国の立場から、そういう見方をするという、両極端だったんで。だからそうでない、客観的にものを見るっていうのか、そういう中国の捉え方っていうのがあるんだなあという感じがしましたね。

Y…アメリカで中国研究が進んでいたっていうか、そういうリソースがあるから可能だったってことでしょね。  
O…要するに国防の観点から。それから外国研究は、一般のアメリカ人は外国に関する関心なんかまったくない。アメリカのことしか知らない、けれども、専門家は本当に細かい情報まで、もう丹念に集めてやっていますよ。

N…先生にとってアメリカ留学っていうのは、中国研究をするんだっていうよりかは、比較教育学研究者として学んだことが多かったという感じですか。



O…ああ、やっぱり違う世界でしょ、その、二四歳の時に初めて日本から出たわけですよ。飛行機も初めて乗ったわけ（一同笑）。だからそういうものですから、もう見ることに聞くこと、すべてが新しいわけですよ。で、やっぱり、外国っていうのはこういうものだと、日本とは違うという感じはその時に思ったわけですよ。だから、外国研究をする上では非常にいい経験だったですね。今、知識が十分あったうえで行ったら、また見方が違うんでしょうけど、ものすごく新鮮なわけですよ。もう本当に見るものすべてが目新しいわけ。だから、感性的な理解でしたけども、外国を見るっていう事ではね、いい経験になりましたね、アメリカ。

N…でも全然アメリカがぶれされなかつたんですよ。アメリカかっこいいとか、すごいなとかっていう感じじゃなかつたんですよ。

O…でも一応は（笑）、アメリカは、すごい国だという感じは、ある程度はしましたけど。差別は、南部でしたからね。あの頃七〇年代の半ばっていうても、まだすごかつたですよ。大学の教師でも黒人のことをアフロアメリカンなんて言わずにニグロと言っていたからね。ニグロっていうのは授業中にも。そういうのが一事が万事でね、ついこの間まで、その市民権運動が出るまではもう、バスだってなんだって乗る場所が違ってた、黒人と白人で違ったような場所でしょ。だから、そういう面ではね、やっぱり、あー差別のある国だなんていう感じがしましたね。だから、いいところも悪いところも含めて、やっぱり日本とは違うという感じがしたですね。

S…中国研究なさる上でも、日本にずっといらつしやるよりもやっぱりアメリカに渡られた方が、いろんな資料は手に入り易かつたということですかね。

O…あのですね、ハーバード大学に、燕京インスティテュートっていうのがあります。それはもう戦前からの中国研究の蓄積で、もう半端じゃないんですよ、情報が。それで、そこに『人民日報』の索引っていうのがありますね、僕が助手になったころだったかな、あるいは大学院だったかな、二〇万ぐらいする一九四八年からずっと七五年までの索引を売っているんですよ。そういうのも作って売っているわけ。まあ、それは本当に一つの例ですけど、文革中

の壁新聞などを全部集めたり、本当にすごいですよ。だから研究面での蓄積はやっぱ相当金と時間をかけてやってですね、そういう面で、すごいと思ったし、得るものは多かったですね。情報、資料も欲しくてね、金はないしね、親から借りて、いつか返すと言いながらとうとう結局返さなかつたんじゃないかなと思います（一同笑）。

N…では、一番初めに中国に行かれたのはいつ…。

O…一九七七年に初めて、京都府民日中友好の船というので行つたんですよ。行きたくて、行きたくて。ドクターの一年生だったですかね。

N…その時はどのくらい行かれてたんですか。

O…いやいや、もう友好協会が組織した旅行だから、二週間かそんなもんじゃないですか。

N…はー。どんな印象でしたか。

O…いやーそれはもう感激ですよ。行きたくて行きたくてしょうがなかったのに、行けたんですから。自分で旅行費用を出すのにわざわざ京都だかどっかまで呼びつけられて、審査を受けてね、研修を受けて、それから初めて行かせてもらえるんですよ。舞鶴から船に乗って旅順っていうが大連のあたりに入るというコースで。それから東北へ行ったり、北京へ行ったりして。あれはもう、感激でしたね。うん。だからその時もすごくいっぱい写真を撮りましたけど。初めてのところってもうカメラのフィルムをものすごく使うでしょ、今行つたって一枚も撮らない時もあるから（笑）。もう慣れてしまつて。いかな。デジカメになつてから、簡単に撮ればいいのにね。あつ結局とらなかつたなと思つたりして帰ってくるから。カメラ持つて行つて。

N…それからでもずっとご苦労されたんですよ。中国調査っていうのは、そのあとはどんな感じだったんですか。

O…いや、七七年に最初に行つたでしょ。七九年の一二月の、もうその時は助手になつてすぐでしたけれども、二回目の訪中っていうのは、大教センターで訪中団を作つて、大教センターで中国行きましようよと、みなさんを説得して行つたんですよ。そうしましたら、丸山益輝先生つて、工学部長をされて、センター長をされたのかな、その先生が

南京大学で心筋梗塞で亡くなられましたね。こりや大変だった。本当に大変だった。もともとそういう病歴はあったんですけど、一旦治っておられた。向こうに行つて、「乾杯、乾杯」つて強い酒を飲んで煙草吸つて。それがやつぱり心臓に悪かつたんでしような。で、向こうで追悼式をして火葬にして、もう本当に大変な旅でしたね。その時に窓口になつてくれたのが、北京師範大学の比較教育研究所だった。顧明遠先生が所長で。それ以来の付き合いですね。一九七九年以来の。それからずっとだから長いですね。当時その比較教育研究所の先生たちとは団長が亡くなつた後始末をどうするかつていうので、中国語出来るのは僕だけだったから、代表団の中でいろんな交渉をやつて、そんなのでえらく仲良くなりましたね。それがいまだに続いているんですよ。七九年、それからしばらく中国へそんなにまだしょつちゅう行けるような状態じゃなかつたんですね。八二年つていうのが三回目でこれが長期だった。半年行けたんですよ。八二年に中国教育部と学振とが交流協定を結んで、日本から学者の招聘をする、相互派遣する、つていうんで、僕が第一号で行つたんですよ。それで北京師範大学に二か月、上海の華東師範大学に二か月、東北師範大学に二か月と、三大師範大学に二か月ずつ滞在して。

Y…国研におられたとき？

O…そうですね。それが八二年に半年、八六年に一〇か月また行かしてもらつて。だから、そう本当に最終講義の時にもしも言いましたけど、この二回、半年と一〇か月なんですけど、僕にとつては長期ですけれども有難かつたですね。もう資料を集めるには本当にいい機会でしたね。『現代中国高等教育の成立』、あの本の後書きなんかにか書いてたんですが、当時はまだコピーもないし、それから、ものすごくやっぱり情報統制が厳しくて、図書館でここだけで見てもいいつてというような資料を見せるんですよ。

N…それ全部書き写し？

O…うん、書き写し、一冊書き写したのもありました。どうしても欲しかつたから。それからあとはね、写真。借り出すことが出来た資料は、借り出して、白黒写真で撮つて。それが撮れてなかつたらいかんから、向こうでネガだけ

にはするんですよ。そうすると、あんまりたくさんフィルムを持ってくるからね、写真屋が怪しんでなんだと言うんですよ（一同笑）。いやいや、ちょっと、研究上でやっているんだからとか言って、それを持って帰って、いちいち引き伸ばして作った資料もあるし、そんなことですね。だから、その時にもうほとんど全国の各省に行ったですね。八六年の時は。八六年のは文部省からとにかく中国の教育改革の全体の調査をしてこいということだったから、あっちこっち行くのが仕事だったんです。だからもう新疆ウイグル自治区から、北の黒竜江省から南の広東までずーっとほとんどの省に行っただすね。三〇省のうちの二七省ぐらい行っただんじやないかな。まあ、点ですけどね。あくまで。

N…でも学生ではちょっと中国研究は出来ないじゃないですか。その頃は特に。

O…あーそうですね。だから恵まれていたんですよ。それで行く先々で、それぞれの大学のトップの人と話が出来たから。研究者ともたくさん知り合いになったし、もう本当に、それは僕にとっては大きかったですね。あれがなかったらそんなに、研究はそんなに進んでなかったかもしれない。だから、木田所長とかその後の国研の所長には感謝していますよ。

S…全部文部省から旅費も出るんですか、中国内での…。

O…中国内での旅費は、一定額の中ですけども。だからその中で経費を自分でやり繰りするように、そんなたくさんではなかったですけど、まあ、暮らすのは十分できる。当時、向こうの物価は安かったし。

Y…経費よりも時間が大変じゃなかったですか。全部列車ですか？

O…列車で、飛行機も乗りましたけど、だけど二日間ぐらい汽車に乗ったっていうのもあるし。

S…そういう時、何をなさる、やっぱり本を読んでなさった。

O…いやーまあ外見たり人と話したり、コンパートメントだから。外国人でもいろんな外国の人にも会うし。中国人と同室っていう時はあんまりなかったですね。こうやって座席に座って何十時間か行くときはまあ中国人とも話んですが、コンパートメントの時は、外国人と一緒にいることが多かったですね。いろんな、そういう人とも会いま

したね。

S…ホテル移動ですか。ホテルに泊まっては移動して、ホテルに泊まっては…。

O…ホテルに泊まったこともありましたがし、知り合いを訪ねたら、解放軍の病院に、北京の友達が紹介してくれたり。広西チワン族自治区に泊まった時ですよ。もう、すぐベトナムでね、あの頃、中越国境紛争の頃でしょ。そのせいか、負傷者が入っているわけ。で、うーとかね、うめき声が聞こえる、薄暗いところ通ったりして行かないといけなかった。それから、その現地の友達もね、僕が外国人だっていうのが初めて分かって、ここは軍の施設だからね、外国人だと他の奴に気づかれましたと。だから、外国人だとわからないようにと言うから、ちよつとその時は緊張しましたね。いやー怖い国だから、日中友好などと言っているけど、下手するともうすぐ捕まりますしね。それから当時は市内でも、ここから先は外国人はオフリミットっていう地区があったんですよ。軍事基地があるとかね、だからそれを分からずにひよいひよい入って行ったら捕まるから。まあ、見た目では日本人は分からないし、中国語も南からきたやつよりも遥かに上手いから（一回笑）。発音はね、だからそんなに分からないですけどね。聞かれてもね。そういう緊張のあったこともありましたね。

N…何か文部省から来ていたら、どこでも大歓迎とか、そんなわけではないんですか？

O…そんな、そんなでもないですよ。文部省からっていうわけじゃない、研究者として行ってるわけだから。

N…でも半年も行って良かったですね。

O…半年と一〇か月とね。一〇か月の方が良かったですねー。うん。八六年がやっぱり本格的でしたねー。八二年の時はやっぱりちよつと食い足りないっていう思いをして帰ってきましたね。三大学で二か月ずつ。

Y…学位論文のベースはその時に？

O…そうですね、その頃集めた資料が、だから手書きで写したやつとかね。そういうのがやっぱり元になっていますよ。僕らの時代は学位論文を課程が終わらないうちから書くっていうのは全くない時代でしょ。中原先生も五〇近

くになってから取られたんじゃないかな。先生もそうだから、学生は当たり前で取らない。だから、課程が終わってから何年もかけて、本も出して、まあそろそろ学会でも認められた、じゃあそろそろ出すかと先生から言われて論文を出すというのが普通のコースでしたからね。僕が、ドクターに在籍の時には、課程博士という制度がすでにあったんですよ。だから、それはやってやれないことはないけど、そんな準備もしていないから絶対書けないでしょ。だからまあ学位も取らないで、その後四二歳かなんかの時にとった。四二、三ですかね。

Y…こっちに戻られてからですね。

O…ええ、大学教育研究センターに。国研に一〇年近くいて、センターに戻ってから学位論文を書いたんです。そりゃあもうセンターの周りの人たちはみんな学位を持っていらっしやる人ばかりで。そんな人たちがね、もう事あるごとに会議のたびに学位、学位と言ってますよ。僕と江渕先生って文化人類学の先生二人がね、学位を持ってなかった。それで「大塚さん、自分は実はそのデイグリー・ミルに毛の生えたみたいなどころから取得したものがあがるが、もうそろそろ取らないかな」っていうような話を二人でしていた。まあ、周りがみんなうじゃうじゃ言うからね、学位、学位って。それじゃあまあ取ったるかと思つて、一念発起して、それまで書き溜めていた物もあるから、書いたのが学位論文でしたね。

N…先生はどうして高等教育に絞られたんですか。

O…うーん、それも大学院の頃に大教センターで。アメリカから帰った頃で英語の調子が良かった頃でしょう。国際会議とか開くと通訳とかに呼ばれていたんですよ。まあ本格的な通訳は助手になってからだけでも、まあちよつとお客さんがある時の相手とか。それでいろいろ国際会議の手伝いとかやっているうちに、ああ、センターっていうのはおもしろいな、高等教育っていうより、センターって面白いなと思つたんですね。喜多村和之先生、馬越先生とかおられて、だからセンターも好きだし、高等教育も好きだし、自分も中国研究やるんだつたら、何かに絞らないといけない。で、小中よりも高等教育の方が面白かったですね。そんなことでずっとやっていて、それで、まあセンターの

助手になろうかなあと思ったんですよ。

Y…センターの助手になられたのは、ドクターの…。

O…ドクターの二年生の時に。

N…早いですよね。

O…ええ、いやーもう長く大学院にいたくなかったんですよ。長くいても、あんまりこれ以上は学ぶことはないな—  
—と、思っていたから、それこそ不遜ですけどね(笑)。だから、もう金儲けもしないといかんなあと思って、そうしたらセンターで助手を募集するって。その時にちょうどこの助手になれという話があったんですよ、比較的。それを断ったから、怒られましたね(一同笑)。そう。高等教育なんか何なんだって言われて、まあ、いいやと思って。それでもう背水の陣でやったんだね。

N…その時、別に比較教育学が面白くないとかそういうわけではなくて？

O…いや、基本的には比較ですから。比較高等教育。だから比較が面白くないというよりも、雰囲気がなく、センターの方がその頃オープンだったっていうのかな。それから、人間的に喜多村先生などには非常に魅力を感じていたし、一緒に仕事をしたいと思ったんですよ。こういうところで一緒に仕事をしたいと。

N…研究室でプロジェクトがあったのに、それが面白くなかったっていうのは本当ですか？

O…いやーそんなことはないでしょう。掃除の研究とかは、非常にやりましたし…。僕はそれなりに真面目に取り組んでおりましたよ(笑)。いやいや、こんな方法では曖昧だなと思っていましたけどね。だけど、掃除の研究はそれなりに勉強になりましたね。だけど、自分がここに戻ってきてからは共同研究っていうのはやってないんです、一個も。学生の時間を取るから。昔のように大学院で研究方法を学んだらいいという時代じゃないですよ。だから学位を取らさないかん。学位を取らせるためにはね、共同研究をやっていたらとてもじゃないけど時間がないですよ。個人研究に専念しても三年で足らないぐらいですよ、時間が。だから、共同研究なんかやってたらとてもじゃないけど誰

にも出せないから、僕はもう共同研究やらないと。もう欧米式の、アメリカ式というか、そういう教育をやるってことに決めたんですよ。

N…先生は今でもそれは変わらず…？私もそのジレンマというか、難しいなと思うのが、自分もインドネシアに一つだけ絞ってやって来ましたが、二宮先生はプロジェクトが大好きだったから。いろんな国を見て。でもいろんな国を見ないと比較をする機会がない。インドネシアとどこかを比べられるわけではなかったのですが、すぐには。なんかこうやって、エイヤーで比較をやってしまうことのトレーニングも一方でいるのかなあと思ったり。

O…いやー、比較研究っていうのはね、やっぱり、一騎当千の強者が集まってやると比較研究になるけども、中途半端な人がやるといいかげんなものになるんですよ。だから、そういう意味ではもう既に、きちんとそれぞれの分野で一家を成している人たちが集まって比較研究をやるんだったらそれは大いにやりたいと思うけども、学生とやる場合は、先生の、まあいわば手足ですよ。それでも学生はそれを通じて学べるから、共同研究を否定しているわけではないんですよ。これはいい方法ですよ。だからそれがやりたいと思う反面、学位論文を書かせるには時間がない。だから、もう妥協っていうかな、もうしょうがない、どっちを取るかって言ったら、この人たちは何のために大学に入ったかって言うと学位を取るためだと。それじゃあもうそれに向けて指導する以外ないなと思ってるから、共同研究は諦めた。分野にもよりますしね。だから、比較なんかも共同研究をやった方がいいのかもしれないけども。社会とかみんなと一緒にやった方がいい分野があるでしょ。それはもう一概に良いとか悪いとかの話ではないですよ。共同研究やるのが、即その学生の学位論文とかそんなものにつながる場合もあるわけよね。一石二鳥が行けるところはいいんですけど。うちみたいに分野が、内容がバラバラのところやると、時間がないだろうなあと。自分がそうだったから、そう思いながらするのが気の毒なんですよ。

S…国研での御研究っていうのは先生のテーマの御研究に邁進出来たんですか？その、国研としてのなんかプロジェクトなんかをやらなければならなかったんですか？



O…プロジェクト、ああ、委託研究もあったし。校内暴力の研究とかもやりましたしね、八〇年代に。一緒にずっと学校を回って調査やって、そんなのもありました。文部省からこういうのを調べてくれというのがあったら、それについて中国はどうなっているとかなんかフランスはどうなっているとみんなで調べる。だからそういうのはありましたね。個人研究をやる、もうひたすら個人研究をやる人もいました。

S…それ、出来るんですか。

O…国研らしい研究を一番しなかったのは板倉聖宣先生ってね、何だっけ、仮説実験授業。とにかく、自分は国研がやれというような研究は一切やらないと言ってる。だけど学問的にはすごいことを残されているわけですね。それから日本教育史の、個別研究がやりたいと思う人と、佐藤秀夫先生みたいに国立の機関だから、公の文章をきちんと、後の人たちが使えるように整理、分類するのが我々の職務であると。給料をもらっているのはそれで、自分の個人の研究は五時以降にやれという事をはっきりおっしゃる人もあったし。比較の部門はそのあたりちよつと曖昧なところがあつて、個人研究もやってもいいよという、まあ、上司が誰かによりますよね。

S…先生はご自身のご研究は、国研勤務中も時間を見つけてされていたんですか。それとも、もう割り切ってご自分の研究は五時以降に。

O…何が国研の研究だったか分からないんですけど、さつき言ったように校内暴力もそうですし、共同研究の論文書きたり資料を集めたりっていうのは、まあ勤務時間中に。それから、アジア教育研究室っていうのが阿部室長のもと、インドをやっている弘中先生と私と三人だった。それはやっぱりアジアとの交流っていうのを、まあ室長が決められたテーマだけれども、それに関するものをやるのがこの部屋の仕事であると言われていたから、それに近づける形で、中国を巡る交流、国際交流、教育交流の問題をやる。それは関心のないことではなかったんで、僕の場合はよかったですね。だけど、歴史資料の整理とか、そればかりを要求されると、やっぱりちよつと困ったなあという感じはしたんですね。比較も歴史は大事ですけども、歴史だけではないから、歴史ばかりやっているのとちよつと辛いなあ

というのはありましたね。

S…国研時代は大学の非常勤とかも全然…。

O…行きました。いいんです。週一回は許されたんで。埼玉大学、東大にも行った、それから、どこに行ったかな、あー東北大とか、ほかの大学にも行きました。

S…集中講義なんか…？

O…ええ。京大にも行きました。そんなんで国研から集中、非常勤で行っていた人は多かったですね。

S…では、国研にいらしてから初めて大学の授業を担当された。

O…そうですね。最初、埼玉大学まで行って東洋教育史。教育史の先生が教育史をやってくれと言われて。その先生は西洋だったから、アジアというか東洋というか、その教育史をやってくれたいということでした。それとやっていたんですね。何年か行きましたね。

S…その中で、比較の教育史、比較教育を担当されていた大学もあつたんですか。

O…うん。筑波は比較教育をやってくれということでした。それから、中国の教育をやってくれと言われることもあつたし。京大は比較教育の中で中国のことをやってくれと、いうことだったですね。中国に関心のある学生がいるんで。その人とはずっとまだいまだに付き合いがあるんですけど。その時はまだ学部生だったけど、大学院の授業に出させてやっていいかとおっしゃるから、ああいいですよと、それで聞きに来てくれたのが南部広孝先生で、ずーっと長い付き合いになりましたね。

N…中国を始めた頃から、ずっと何か変わらない興味っていうのはありますか。

O…えー難しいなあ…。何でしょうねえ、まあ月並みですけどやっぱりあの広さと多様な国だから、ここをこれが中国であるっていうのがなかなか言えないなあという多様さですねえ。それは大変さでもあるし、興味でもありますよね。

S…日中関係って、政治的な問題に発展したり、なんだかんだやっぱ状況が変わりますよね。そういう中で、ご研

究に影響するようなことはなかったんですか。

O…ああ、そうですね。教育つてのは割と、そういう面では人があまり重視しないところだから、政治とか経済とかでものすごく厳しい発言やっていたら、中国政府にいらまれたりっていうのはあるかもしれませんが、あんまりその面での、日中関係がもろに自分の研究に影響することはない。本当はしないといけないんですけどね。例えば、天安門事件が起こった時に、やっぱり研究者としてはそれなりの姿勢を示さないといけないでしょう、研究を通じてね。だけど、まあ、政治が直接自分の研究に影響を落とすとか、そういう事はあまりなかったですね。

S…研究者同士の人間関係っていうのはもう全然揺るがない。

O…あつそれはないです。中国人はもう個人、一旦個人的にいい人間だと認めたら、国がどうなろうと友達だからという事なんです。だから資料を得るのに、トップから行く、その機関の長から行って、こういう資料が欲しいんだって言うか、あるいは友達関係を使って、どっかから出しちゃいけないようなものも取ってきてくれて見せてくれるとかね、そのどっちかなんです。で、いや本当に中国人だ、日本人じゃなくて、親友として付き合っている人が何人かいるというのはまあ、ありますね。

Y…そろそろ時間になりますが、最後に教育学講座の教員に伝えたいことはありますか？

O…いやー、どう話すかね、いや自分がたいしたことやってないから何もありませんがね。いやー困ったなー（一同笑）。ああ、今ちよつと急に思い出しました。この作業をやりながら、自分の研究に対して大きな影響があったことは何だろうなと思つて。昨日一生懸命五インチのフロッピーとか捨てたんです。三・五インチも捨てたんです。それから、CDも捨てたり。だから本当にワープロ使いだして、「文豪」かなんかでやり始めたのはついこの間なんです。よね、国研の時に。まあついこの間でもなくなつたのか。だけでも、五インチのフロッピーが腐るほど出てきて、それはもうみんな捨てちゃったんですが、シユレッダーにかけて。だから、あれがやっぱり研究のスタイルに大きく影響を与えたなあと思いますね、実に軽量化。軽量化だけでも、逆に安易になりすぎてしまつてですね、研究が。原

稿用紙もいっぱい出てきたんですよ、整理していたら。原稿用紙だってワープロだって考えることは同じなんだけど、でもやっぱり書き始めるまでの、しつかり考えて書くっていうのは、やっぱり紙とペンなんですよ。スタイルも変わったし、これは大きいなって感じたことがありますね。

S…先生、いつごろからワープロで書かれるようになった。

O…国研に九年半おりましたけど、最後の三、四年はワープロを使いましたね。確か、半分は使ってるかなあ。さて、元の話に戻って、いやあとくに先生方に伝えるようなことはーないですけどねー、本当に。まーうーん、何か気の利いたことが言えればいいですけど（一同笑）。本当に何にもないですよ、みなさん立派な先生ばかりだしね、うーん。

S…比較教育学の魅力と言うか役割と言うか意義っていうのはどういうふうに。

O…ああ、そういうことで伝えますか。僕はやっぱり比較教育っていうのは教員養成のなかで、ものすごく大きな意味があると思うんですよ。それは日本の教育がどうなっているかっていうのを教師になろうとする人に伝えるのも大切ですけども、認識を変えていくっていうのは自分の今までまったく想像すらしなかったことを、ぶつけることで人間は認識が変わるって固く信じているんです。そうすると、一番良い材料は手の届かない外国のことだったりして。だから、教員になろうとする人に、外国の事例を、まあ、何でもいいという事じゃなくて、その学生には本当にこれを与えてやったらいいだろうなっていうものを精選して与えると良いんでないかなと。だから、いろんなところで外国研究はされるし、比較教育は、何か存在価値がだんだん減ってきて来ますけれども、それでも、教員養成の中で比較教育の占める意味っていうのは、ますます大きいんじゃないかなと思いますね。もっとうまくこの教育学部のカリキュラムの中に組み込んでもらえるようにしたいなと思います。まあ今でもあるわけですけどね。

Y…ありがとうございます。時間をかなり超過してしまい申し訳ありません。

S…ありがとうございます。

N…ありがとうございます。